

企業人と内観

感性開発センター・「創庵」

柳 井 弘 志

私は個人のモチベーション（ヤル気）を開発し人生を成功させるための教育プログラムの販売代理店とそのフォローアップを主目的とした研修施設の運営を本業としております。そして、その研修施設の研修内容の中心になるものが内観であります。仕事柄、今まで数多くの経営者やその社員、家庭の主婦、学生等に接してまいりましたが、そのたびごとに内観の必要性を感じてきました。

人生の成功、幸福あるいは悩みの解決と、自分自身を知るといふことは、本来、表裏一体のものであり、内観は最も効果的な手法の一つで

あると思います。とかく、私たちは成功ということ、テレビや雑誌で見るとような華やかでスリリングなものを連想したり、物や金や名声といった人との比較で判断しがちであります。

私の取り扱っている教育プログラムの創業者、ポール・J・マイヤーは、「成功とは、人との比較ではなく、自分にとって価値ある目標を前もって設定し、段階を追って実現すること」と定義しており、さらに「究極のあるいは本当の人生の成功とは自己に与えられた潜在能力とチャンスを最大限に生かして、経済、家庭、社会、精神、教養、健康面の六つの分野においてバランスのとれた成功を成し遂げること」とも定義しておりますが、さて読者の皆様は、あなたの人生の成功をどのように定義されますか。

この定義のように、目標がなければ成功はあり得ませんし、人生においてバランスが失われれば、私たちは毎日の生活に無理が生じ、悩み

や苦しみ、ストレスといったものを背負ってしまい幸福感や充実感は失われてしまいます。私も含めて周囲の人々の生活を見てみますと、物や金あるいは名声といったものに固執したり、働きバチの人間として家庭や健康までも犠牲にし、その結果、自分自身と人生を見失い、ストレスや心の葛藤に苦しんでいる、といったようなことが、今の日本にはよく見受けられます。

しかし、現在の日本の物質的繁栄は、日本人のこのような努力と勤勉さのお陰でもあります。戦後四十数年経過し、衣食住、教育、経済どれをとってもその当時からして想像もつかないほど豊かな生活が楽しめるようになりました。

しかしこのような豊かさの中で、近年、住みにくさや、きゅうくつさを感じたり、テレビマンガの「サザエさん」の中になつかしさやホッとするものを感じたりするという人の声をよく聞きますが、少なからず多くの日本人が感じていることではないでしょうか。

このことは、私たちそれぞれの人生観や生き方にどこかバランスを失っているのではないか、幸せの基準が物質的、金銭的に偏りすぎていたのではないか、ここで一度立ち止まって自らの人生を振り返り「自分にとって、本当の幸せとは、本当の成功とは何か」を考えるべき時ではないかという心の警鐘と考えられないでしょうか。

私の仕事の関係でおつきあいしている数百家の企業の経営者の今年の経営方針や社員教育の中にも、あるいはラジオ、テレビの番組、書籍等にもそのことがうかがわれます。また、企業人として、今まで高度成長経済と終身雇用の保護のもとに誠実に働いていれば幸せな家庭生活が築けていたサラリーマン社会にも、企業を取り巻く経済環境の変化や、高齢化社会、バブル崩壊後の不況等の影響により、倒産、縮小、再構築、分社化をよぎなくされ、その結果として指名解雇、肩たたき、出向と厳しい試練の時が

押し寄せ、その人の人生や家族の生活にも大きな不安を与えるような社会状況になってまいりました。

今まで平穩無事に暮らしてきた企業人としても、もはや自分の人生の幸福や成功の保証を企業や国に託すわけにはいかなくなっています。

そこで今、心ある企業人は自分の人生について、これからの人生設計について、自分の成功・幸せについて、真剣に考えるようになりました。

このような時代背景の中で、内観は社会的ニーズを満たし得るものであり、非行の更生、心身症の治療、家庭問題等、人生相談の対象者のためだけでなく、人生を建設的に生きようと努力している人々にもその門戸を広げるべきでしょう。

もちろん、今までもそれは決して閉ざされていたわけではなく、どんな人をも拒まない間口の広いものであるのですが、もっと一般化するために、何かを組み合わせたリ、アフターフ

ォローシステムを取り入れるとか、企業人や一般人にとって気軽に受け入れられ、具体的な問題解決につながるような方向づけのための手法を取り入れることも検討する必要があるのではないかと思います。

一方、このような状況の中で企業においても人員整理や事業縮小だけでは問題の根本的な解決にはならず、社員の仕事に対するモチベーションをいかにして開発するかということが企業の再生の最大の課題であります。そして従来のアメとムチ式のヤル気啓発だけではもはや機能しなくなっており、そこに個人の感性を開発する様々な手法が社員研修に取り入れられるようになってまいりました。

そのような中で、内観法を社員研修として企業人に導入するにあたって、現実的に企業がかかえている問題とニーズ、その対策について述べてみます。

一、企業の問題

- ・売上、業績の不振
- ・人材不足
- ・会社の理念やビジョン、目標が明確でない
- ・社長自身に迷いや動揺がある
- ・組織の調和とコミュニケーション不足
- ・社員の高齢化による意欲の低下
- ・社長自ら3Kの仕事に気がし、使命感や誇りをもっていない
- ・教育の必要性を認めるが、何をすればよいか効果的なものが見つかからない

二、企業のニーズ

- ・後継者の育成
- ・社内の志気の向上
- ・組織の調和と自律、自発心の育成
- ・社員の意識改革と質的向上
- ・社員の定着
- ・生産性の向上

三、内観導入上の問題

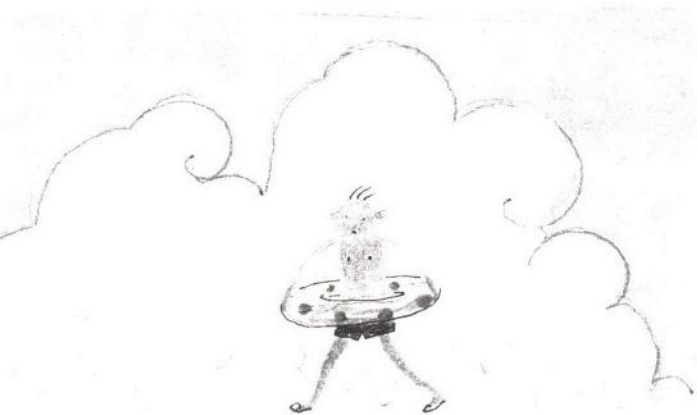
- ・時間がなく人員に余裕がない
- ・社長自身が行かず社員を行かせようとする
- ・社員の反発
- ・内観に対する誤解
- ・内観導入後のフォローシステムが会社になく、効果が具体的に現れないか、現れても元にもどってしまう

以上のようなことがあげられますが、この問題解決の一番のポイントは社長自身であり、社長自身が自己を見つめ、内観の正しい理解のもとに自己反省と感謝報恩の心で仕事に使命感をもち、新たな決意のもとに社員の明確な方向を示し、夢に向かって具体的に積み重ねていく経営をやり続けてゆくことが、全ての問題解決につながるのではないのでしょうか。自己実現の人生を生きるためには、先ず、自分自身を知ることであり、それは経営者も、そこで働く企業人も共通でありましょう。そのためには私たちが運動し続けなければならないと思います。

池上吉彦。湯の里分校の内観者たち(17)

夏休みを利用して二人の生徒が内観することになったとき、同じ町内の中学一年の男の子を持つお母さんが、私も内観させてもらえないでしょうかと相談に來られました。母一人子一人。幼児期から祖母に預けて働きに出ていたのですが、中学生になって外泊などしたので強くたしなめたところ、殴りかかってきたということでした。暴力による子の反抗はショックでした。しかし、このお母さんは一方的に子を責めるのではなく、自分の反省すべき点を知りたいと思ひ、湯の里分校に通学している知り合いの子が「内観」というものをして大変化したのを知って、I先生に相談に來られたのでした。校長の許しも得て、家庭科室の畳の部屋で内観をはじめられました。

I先生を驚かせたのは、その食べ方の汚さでした。夏休み中は、I先生の奥さんが分校まで通って來て食事を作ってくださいしていました。二人の高校生は一品も残さず食べているのに、このお母さん



はあちこち食い散らしてそのままにしているのです。I先生の「内観経過覚書」には食事の項もあるのですが、第一食のところから写させてもらいましょう。

一日目夕食Ⅱ野菜・汁・漬物・飯残。汚い。

二日目朝食Ⅱ野菜・汁・漬物・飯残。汚い。

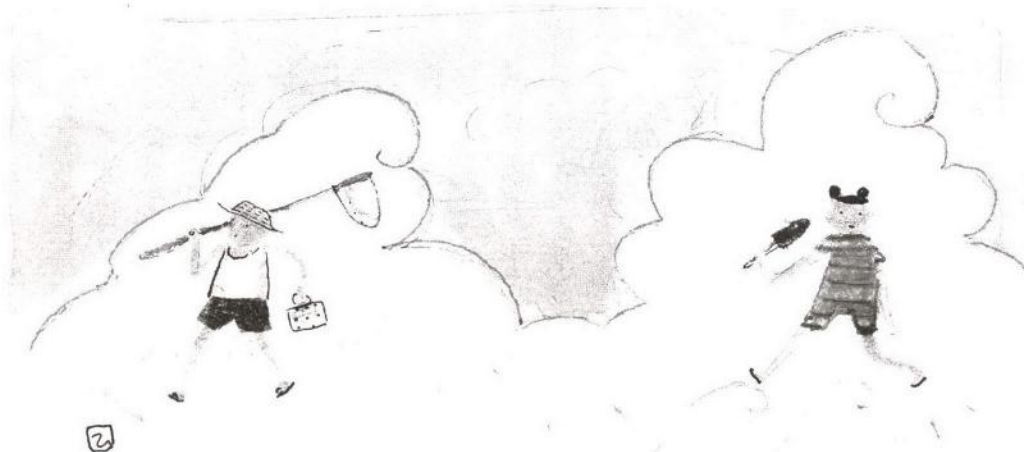
同 昼食Ⅱ肉・野菜・汁・飯等残。汚い。

同 夕食Ⅱ野菜・汁の実・漬物・飯残。汚い。

というように、これでお母さんなの？という大変わがままな好き勝手な食事です。

変化が起こったのは、四日目の昼食からです。覚書には「アスパラ残。きちんと」食べ残しがありました。六日目の昼食以降はまことにきれいな食べ方になりました。食べられた理由は「食事を作った人への感謝」だと言われ、これまで心から感謝したことがなかったと涙を流しておられました。自分の回りのあらゆる人々へのお詫びと感謝の今の心を忘れず、子どもを愛情いっぱい育てたいと明るく語られていました。

(筆者は高校教諭)



内観をより深くするために

・瞑想の森内観研修所長・

柳田鶴声

第VI回

□こだわりを積み重ねて

非常に悲観的で惨めな状態で生まれて経過したように見えていても、実は自分で苦勞みたいなものだけを拾い出して、愛情の落ち穂拾いの逆のガラクタばかり拾いこんで、それが自分だと思いついて生きています。だから、内観で本当の姿が見えてくると、幸せそのものなのです。吉本先生の話のように「この人気の毒だな！」と思うような人でも、決してそうではないということが

本人にわかってくる。「気の毒だ」というのは客観的な言葉です。主観的には違うのです。自分が後で拾ったガラクタだけを自分だと思っているから、苦勞しているのです。そうすると捨ててきたものは、全部幸福感です。ですから『どのような方でも、深く内観すると救われる』というのは、そこにあると思うのです。ガラクタが無くなるから。全部ガラクタの山で、それだけを自分が背負ってきている。本当に滑稽といえば滑稽ですね。

□離せないものを徹底して見る

もう一つというと、自分が最も価値あるものと思っけて離せないものが、実は人からみると最も唾棄するものというものがあります。「これが俺だ」としがみついているものは、自分にとってはものすごいものだけれども、他からみると最も不必要なものになるという場合が多いです。アルコール依存などは特にそういうことでは象徴的といえます。アルコール依存症の場合、お酒を飲まなければなんでもない人です。理屈から言えば、お酒を飲まなければ、金も要らないし、薬も要らない。何にも要らないで健康になるという宝があるのですけれ